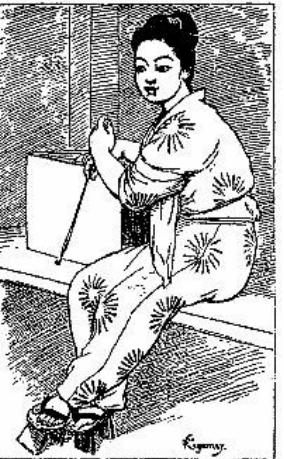




47. 刺背をした人足(本文131頁)



48. 昼食の給仕をする若い娘
(本文131頁)



45. お堂の階段で米を研ぐ女中(本文130頁)



50. ジャムつきのパンを見つめる女
中(本文131頁)



ギメの「東京日光散策」より ▲M9・9・10上野発▼

こうして、われわれは五時に早先より出発した。上野公園を走り見や、どこまでも静か道を進む。その道は、首府がいかに豊かなつて、新しい概念を与えてくれる。

車夫たちに一息入れるために、竹ノ塚 *Takano-tosaka* で最初の休息。旅館の中庭の、帆掛け船の形に刈り込まれた木が、旅人たちを慰藉させる。

再び出発し、昼食の時間にやっと越谷 *Koshigaya* に止まる。ホテルは別のはとりにあるので、新鮮な魚を食べられるに期待する。しかし日本では、高級のサービスが十分にゆき通っているので、もはや川で漁をする苦労はないが、今のところ海の鮮魚は届いていなかった。パドルのよう自分の腹を開くことなく——このことはしかも日本人の思想にかなっているようだが——料理女たちは、若狭の符にとりかかる。その結果は誤わしく思われる。

一人の女性が、小さな神社のお堂の階段に座を添えて、人力車夫の米を研いでいる。それは確かにわれわれの駄馬のからずである。しかし、われわれのは、用心して持前の食糧に頼るのがたぶんよいだろう。何かわれわれのための晏食が作られるまで、飲食をし、そして服装しよう。それは、われわれ旅行者の役目なのだ。台所を訪ねる。すべてきちんと片づいていて興味を引くが、このたくさんの奇妙な形をした異常な色のガラス瓶や小さな簪は、台所というより調理場の物がある。食糧を残り付けていたコック長の威儀は、コックというよりはむしろ医師を想起させる。

おや、めった打ちにされたような男を見た気がした。赤い斑点と青い斑、まるで傷だらけの背中のようだ。それは傷ではなく、芸術的にデッサンされた剥骨をした人足であった。背中の真中に、典型的な美人顔が点描されている。

若狭が揃えられ、缶詰の缶が開けられるまで、われわれに昼食の給仕をすることになっている若い娘の一人は、ごく小さいハイブ (Hib) や、勢かに煙を立てている。彼女は、われわれが通りかかるとはねえ、義務的ではあるが夢想のよい言葉をわれわれにかけても、理解もめうことができないので、ひどく我意がついているように見える。彼女が両足に履いている高い下駄 *geta* は、足元小屋の室内装の小さな脚踏を思い出す。これで腰を直したええ風邪をひくだろうから、われわれはこの不便な自分たちの鞋を履かなければならぬだろう。できるだけ、履かないようにしよう。

食卓につこう。いや、とにかく部屋の座の上に身を投げ出し、食卓もなくじかに食べよう。生まれて初めてパンを見、ジャムを見つめる女中たちの大喜び感動。彼女たちは、これらの食物の作り方を長々と説明してもらつて、ひどく専門しているようだ。そしてさらに説得するために、われわれはジャムを塗ったパンを彼女たちに提供する。彼女たちは赤くなつて受け取り、あたかも感謝の木の実でもあるかのように、不安そうにじろじろと見るが、思い切って噛むことができない。

われわれは出発する。この若い娘たちが、われわれの不しつけな厭惡しが遠慮からつからパンに塗ったジャムを棄てて食べる心の中で囁みながら。

大した出来事もなく、オガサ *Ogasawara* 「大袋の張りか」を抜け、泊まる予定の幸手 *Yoshida* に到着する。

越谷で再びあのジャム付きパンの女中さんたちに会う。彼女たちはジャムを食べたことを得意になつて知らせ、実験をまた始める気になつてゐるようだ。われわれは非常に大きな喜びをもつてこうしたニュースを受け入れるが、急いでいるので、早々に切り上げる。酒はますます車夫たちにその効果を示してゐるのだから。彼らはわれわれを匿き去りにするかも知れないのだ。

パリの国立ギメ東洋美術館は、実業家エミール・ギメ (1836-1919) が蒐集したコレクションをもとに1889年に創設された。1945年には国立美術館東洋部となり、ルーブル美術館のアジア関係の豊富な蒐集品の移管をうけて、今日、ヨーロッパ最大のアジア美術コレクションを誇る美術館となつた。

前ページの素描は レガメの「日本素描紀行」より

目標黄子主宰で「越ヶ谷の梅見」と題して淨光寺で開催され、俳人の高浜虚子が参加した。この折の虚子の俳句が「話し去る／人見送りて／畠打女」である。吟行会終了後、虚子は当店に立ち寄ったと伝えられる。

昭和二十年から昭和二十二年にかけて小説家・野口富士男氏が越ヶ谷本町に疎開して大沢橋附近へ度々訪れて小説「死んだ川」に描かれています。昭和四十四年七月一日号には東武鉄道の広報誌「マンスリー・東武」に「断崖のはての空」と題して文章を寄稿しています。後年昭和五十七年に河出書房新社から出版されています。

昭和三十八年頃から昭和四十三年頃まで浪曲家・玉川福太郎(のちの二代目・玉川勝太郎)師匠、福太郎時代に頻繁に訪れる。幼少時代に大沢に疎開していた関係で、先代が親交を深めました。

昭和五十四年読売新聞埼玉版に紹介されています。うなぎ料理について、特に二段に重ねられた「特上うな重」の紹介記事です。初めてマスコミに取り上げられる。

昭和五十四年頃、TBSラジオの中継番組で越ヶ谷本町に訪れていた落語家・月の家円鏡(現・橋家圓鏡)師匠が中継終了後その店主とともに昼食に訪れた。翌年から三年間、弟子達と共に訪れました。

平成五年四月テブコケーブルテレビで第一回目の店紹介が放送される。レポーターは丸口アキ子(現・木村アキ子)さん。一日五四七日間計三十五回放送される。

平成八年三月十二日(火)毎日新聞埼玉版の「日光街道いまむかし—越谷宿一」(11)の中で紹介される。記事内容は省略。

平成十年十二月二十三日(水・祝)テレビ東京(12チャンネル)の埼玉県の広報番組「さわやか彩の国」の日光街道・越ヶ谷宿で紹介。レポーター・中野さん。放送は平成十一年一月十四日(土)午前9時から1時間放送される。取材撮影は日経映像が撮影する。

平成十三年十一月二十九日(木)埼玉新聞の「宿駅・伝馬制度」制定400周年記念企画「日光街道ルネッサンス第5回街道を訪ねて」に掲載される。取材記者は田部井記者です。

平成十四年四月五日(金)日本テレビ(4チャンネル)の旅番組「ぶらり途中下車の旅—東武伊勢崎線—」の越谷駅のところで紹介される。旅人は俳優・金田賢一氏、撮影取材は日テレ映像、放送は四月二十七日(土)午前9時30分から関東地方で三十分間放送された。

平成十五年七月十五日(火)テブコケーブルテレビのグルメ番組「ミニカフェ」で紹介。レポーター・木村アキ子さん、放送は七月二十一日(月)から二十七日(日)までの1週間一日五四七回放送される。

温鈍屋の歴史について

温鈍屋(うどんや)は江戸幕府三代将軍・徳川家光(とくがわ・いえみつ)が整備した五街道(東海道・中仙道・甲州街道・日光街道・奥州街道)のうち、日光街道の第三番目の宿場、「越ヶ谷宿」の大沢橋際北詰に位置し、創業は元和元年(1615年)であります。店名の由来は「温かい飯(めし)を提供する店(たな)」として、當時、元荒川で獲れた小魚を煮付けにした「一膳飯屋」として始まりました。ちなみに元和二年(1616年)は江戸幕府初代・徳川家康が薨去(こうきょ)した年です。うなぎ料理が現在のような料理法に成ったのは江戸時代・寛政年間です。それまではうなぎを長いまま適当な長さにぶつ切りにして、串に刺して蒲(がま)の穂のまま刺して炉端で焼いたから「蒲焼」と称しました。現在のように、裂くように成ったのは寛政年間以降でした。また、大山家の先祖は薩摩藩士であったと言えられています。

天保十二年九月、温鈍屋は当時の大沢町世話人として越ヶ谷宿の總鎮守・久伊豆神社の旧天水桶を寄進したと名前が述べられています。当時の当主・大山傳吉でした。天保十二年頃、大山万次郎によってうなぎ・川魚料理店を始める。

明治四年四月三日(月)、流山で捕えられた新撰組の局長・近藤勇が処刑地・板橋へ護送される途中、大沢橋附近に立ち寄ったと伝えられています。

明治九年九月十日(日)フランス・リヨン出身で実業家のエミール・ギメが画家のフェリックス・レガメを伴って「日光参詣」の行きと帰りに「温鈍屋」に立ち寄っています。その様子は彼が帰國後に出版した「東京日光散策」(青木啓輔訳・雄松堂出版刊・昭和58年7月25日)に描写されています。レガメのスケッチも数多くあります。

明治四十二年頃から大正十二年頃にかけて文豪・田山花袋氏が頻繁に越ヶ谷に訪れる。「春雨」(金星堂刊・大正九年九月十五日初版)が出版され、大沢町に在った芸者置屋の芸者・玉子の長編小説です。そこで「料理屋」として描写・舞台となっています。翌年、「湯」(日本評論社出版部刊・大正十年二月二十日初版)が出版され、大沢に居た寧の在る芸者・蝶次の回想小説でした。元荒川附近を描写し、「料理屋」として再び舞台となる。紀行文「東京近郊一日の行楽—越ヶ谷の梅と桃—」(博文館刊・大正十二年六月二十日初版)が出版され、越ヶ谷を紹介する紀行文に実名で紹介される。冒頭の部分は原文のまま、別紙に紹介します。

大正二年には紀行作家・大町桂月氏が夫人と共に久伊豆神社初め越ヶ谷のあちらこちらを訪ねて居ります。

昭和十二年三月七日(日)「ホトトギス」派の武藏野吟行会の第七十九回が楠

温鶴屋及び大山家に関する文書一覧

(発表)

I. 大沢猪の爪

福井貢貞 著
元禄8年(1696年)9月17日

II. 大沢古馬鹿答

江沢昭融 編集
天保11年(1841年)9月

III. 東京日光散策

エミール・ギメ 著・フェリックス・レガメ 畫
原題: Promenades Japonaises Tokio-Néko 1880.
(昭和58年7月25日翻訳出版)

雄松堂出

金星社

IV. 春雨

田山花袋 著
大正9年(1921年)9月15日発行

日本評論社

V. 潟

田山花袋 著
大正10年(1922年)2月25日発行
VI. 東京近郊一日の行楽——「越ヶ谷の梅と桃」
田山花袋 著
大正12年(1923年)6月20日発行

博文館

VII. 白鷺

野口富士男 著
昭和24年(1949年)

講談社

VIII. 死んだ川

野口富士男 著
昭和32年(1958年)12月

IX. 川のある平野

野口富士男 著
昭和

X. 断崖のはての空

野口富士男 著
昭和37年(1962年)

平成十六年二月二十六日(月)毎日新聞東京本社論説委員・岩見隆夫氏(政治ジャーナリスト)が日光街道の取材で来店。はとバスの大型バスで近藤編集委員、山口広報員、カメラマンを伴って5・6名で来店する。

平成十七年六月十九日(土)国際的デザイナー・山本寛斎氏が来店した。越谷・蒲生の桂スタジオで仕事中、噂を耳にして来店したと言いました。

平成十八年六月十五日(木)テブコケーブルテレビの林家いっ平(現・二代目林家三平)師匠司会の情報番組「さわやかカフェ」の質問コーナーで「土用丑の日の疑問について」の取材がある。「土用丑の日」の由来について解説する。レポーター・元アイドルの揚田、あきさん。一日四回計二十八回放送される。

平成十九年八月二十五日(土)業界専門紙『養殖新聞』の連載コーナーの「大高未貴の続・百謡件語録(140)」に掲載される。大高未貴さんが自ら取材する。

平成十九年九月二十七日(木)NHK-B S 2、NHKハイビジョンの旅番組「街道でくぐ旅—日光・奥州街道踏破—」の第四日目「越ヶ谷宿」の生中継地点となる。オファーは8月18日(土)にある。旅人はプロ卓球選手・四元奈生美(よつもとなおみ)さんでした。撮影は9月26日午後2時40分到着の撮影、27日午前8時から15分間全国に生中継。駒の駐車場で卓球試合のデモンストレーションが行なわれる。午前9時15分頃駄壁宿へ向けて出発。年末年始(平成十九年十二月三十日~平成二十年一月一日)総集編を放送。第一回目日光街道踏破編を放送。その中で「越ヶ谷宿」を放送される。

平成十九年十一月八日(木)サンシティーの歌手・美川憲一コンサートに「うな重」を楽屋に届ける。以来、南越谷のサンシティーでコンサートが開催される都度ごとに届ける。

平成十九年十二月一日(土)から平成二十年二月二十九日(金)まで越谷市商工会推奨の「鴨ねぎ鍋」始める。二十年度は平成二十年十二月一日(月)から平成二十一年二月二十八日(土)まで取り扱った。昭和20年代から昭和30年代に扱っていた『鴨すき焼き』も取り扱う。

平成二十年二月十四日(木)月刊誌「へら鮒」のコーナー記事「釣り味」(14回目)の取材。記者は大場勝良氏。平成二十年三月一日発行(土)で四月号「へら鮒」に紹介される。

平成二十一年九月一日(火)落語会を開催予定。第1回「おおさわ橋落語会」と題して新進気鋭の落語家二名出演予定。「落語会」終了後、特別料金にて出演者参加の「大懇親会」開催予定。出演落語家は二つ目・立川らく里さんと二つ目・立川吉幸さんを予定。



春 雨

田山花袋著
大正9年9月15日発行
金星社刊

昼間は三味線のお稽古だの、みせに出入りする大勢の人々の面白い話だの、見えず口癖のようにガミガミ言う婆さんの小言にまぎれて、つい忘れる事もなく忘れていることが多かった。しかし夕方にまちを掠(かす)めて通つてゆく電車の音を聞くと、玉子はいつも儘らなく東京の方をこいしく思った。ゴーという音は遠くの野の方から来て、半鐘台や二階屋のくつきりと夕焼けの空に掠したように見えていた町を通つて、鉄橋をわたつて、そして向うの方へと段々遠くなつて行った。玉子はお座敷に出ている時でも、其時は緑側の方へ出て行って、欄干に凭(よ)ってその遠くなつて行く汽車の音を聞いた。

『何うしたの？ また東京を思い出したの？』

眼の縁を赤くしているのを他の祖さん見られて、こう言われた事なども一度や二度ではなかった。

『いいえ、そうじゃないのよ、ちょっと今……』こう言って、玉子は涙を飲込むようにして強いて笑顔をつくつて見せた。

鉄橋を渡る時には、汽車の音は殊に高く轟くようにあたりに響いて聞こえた。その鉄橋の上からは、いつも玉子の隣(よ)ばれて行く料理屋(温鈍屋のこと)が見えていた。もう一軒の方の料理屋(天芳のこと)町の通りにかかっている橋(大沢橋のこと)を少し行った處にあった。玉子は其處で此方に来てから覚えた踊をよく踊った。

玉子は色の白い背の小さくりな姉妹な子であった。東京から来たお酌さんと言う名で料理屋の間にきこえていた。『澤屋(菴者置屋の寺屋のこと)では好い子を置いたもんだ。今にどんなによくなるかわからねえ。』こう人々は噂し合つた。

停車場から町の方に来る茅葺屋根の多い路を世話をして呉れた男と母親とに伴はれて、澤屋の家に入って行つてからもうかれはれ四ヶ月以上になつた。来た時はまだ暑かつた。紗(ろ)の单衣(ひとえ)などを着ていた。婆さんは何の彼のとチヤホヤして、裏の畠から玉蜀黍(とうもろこし)などを採つて来て焼

—略—



田山花袋著
大正12年6月20日
博文館刊

越ヶ谷の梅と桃

越谷は、例の中川(元荒川の間違い?)がその町の中央を横ぎつてゐるので、感じが好い。奥へた川、そこに浮んだ白い藻の花、田舎、葡萄棚のある橋の畔の温鈍屋(うどんや)といふ茶屋——汽車の中から見ても、下りて歩いて見たくなりやうな町だ。

それに、奥州街道の一駅としての気分がまだ何處かに巴湯を巻いてみて、昔の旅客の都を離れて、遠い旅に上つて行つたさまなどが思ひやられる。江戸を出て、旅客は大抵此處で最初の一夜を送つた。

梅林は町とは反対に、停車場の西北の方にある。畠の中の梅の林だから、別にこれと言つて興味を惹(ひ)くほどのところでもない。花の時分には、かけ茶屋などが到る處に出てゐる。

越ヶ谷では、梅よりは桃の方が好い。それは停車場から五町、小山があつたり、春畑(むさばたけ)があつたりして、その中に咲いてゐる桃の花は、一種ラスチックな感じを起させる。場所もさう狭くない。田園道(たんぼみち)をぶらぶら歩くのには最も好いところである。

町の東、中川(元荒川の間違い?)の下流に、久伊豆神社がある。十二三町ある。俗にさい神さまと言つてゐる。老樹が多く、それに藤の花が咲いて咲いてゐるさまは、人目を惹くに足りる。房も柏壁のよりも長いと言はれてゐる。

私は越谷では、出羽屋といふ藝者屋を知つてゐる。その娘さんも知つてゐる。ある年、私は、其處の四格子の中の一間に坐つて、外を通り車を見てみた。その娘さんが煎餅などを持つて來(き)て呉れた。

そこを出で私はやがて、天芳といふ町の料理屋で飲んだ。そこの二階はちよつと綺麗で、そこから中川(元荒川のこと)が一ところ少し見えた。藝者は二三十人ゐるが、一人として碌なものはゐないといふやうな處であつた。その一間を私は今も忘れ兼ねた。

何故なら、私は其處である女と一生の別れをした。その女は何處に行つたか、今ではもうわからないが、その追憶はしつかりと私の心にからみついてゐて、容易に去らない。その天芳の二階の一間は、汽車の中からも見えるが、そこを通る度に、私は色の蒼白い背の高い早口の女を思出す。



うなき、無ナギ科の成虫類。オウナギは近似種で、アリ、ヤツメウナギは無脊椎エラブウナギは尾虫類である。縫をめぐる伝承はきわめて豊富であるが、中でも、顎者なものでは空腹苦難信仰に關連している。「魔除け憑様のお使いだから」とか、「蟲苦難様の好物だから」との理由で、ムラ全体、同族、あるいは寺社、個人などを

食べない伝承は今日でも各地で聞かれる。また、虚空蔵菩薩が丑・寅年生まれの人の守り尊とされ、この年の人は餃子を食べてはならないとされている。岐阜県奥美濃村鶴谷では餃子を捕獲することも、食べることも禁じ、犯すと村ハチアブとする村撻が決まるほど厳く守られ、現在でも村春を餃子としているほどである。伊吹山脈領に特徴的に分布する雲神社は餃子で新田開拓と洪水の被害を慰藉に迎世に多くのまつられた。洪水の本体が餃子と考えられ、これを説教することにより、洪水の被害を回避しようとした真言宗密教者の活躍が想定される。地藏とナマズの関係のように災害の起因者としての性格と、救済者としての性格が餃子と洪水の場合も伝説上で語られており注意を引くとともに、八重山島嶼やフィリピンのミンダナオ島では地震を起す餃子の神話が伝わり、大地を支える世界観として餃子がナマズに先行したとも考えられる。福井県には風の神社が多く分布するが、この氏子はやはり餃子を食べない。伊豆の三島大社はじめ各地の三島神社は餃子を使いとし、京都小石川の三島神社では安宿信仰の神話から風の絆馬が奉納されている。長野県御岳神社の山口の御岳山神事では一月になると鬼が魔除祈願のために餃子を放生するが主な行事となっている。このように虚空蔵菩薩を本地とする寺社に關係する餃食禁忌に対して、「一般に知られているのは土用の丑の日に餃子を食べる忌俗である。諺のみならず、水神に關係する「う」の字の付いた、梅子・しおどんなどの日に食べる夏道しがしない」という。餃子は紀文時代から食せられ、「刀萬葉集」には、大伴家持が歿せた人に供養ある食物として餃子を勧めた歌があり、「占來から朱蜜羹甘味の食物として考えられた」とある。

むじかくり　虫送り　箱につく害虫を追い払い行事。虫追い・虫祈願・サネモリオカリ(虫送り)・ウンカ送りなどともいう。稻作における虫の害は深刻で、農業による駆除が行われるようになるまでは日本各地の農村で盛んに行われた。江戸時代の文化年間(一八〇四一八)に実施された慶代監督の「諸國風俗図状」による調査に対する答書にも各地の虫祈願の行事が報告されている。この虫送りの対象となる虫はウンカが圧倒的に多く、被害が大きかった西日本各地では特に盛んで、むしる冷害の心配の多かった東北地方では、行はれていたが西日本ほど盛んではなかった。現在ではほとんど残っている。廃れた時期については大正になるとていう場合と、第二次世界大戦前までといふ場合の二つの傾向がある。現在では虫除けのためというよりも、地域の伝統行事として行なっている例や復活した例がある。時期は田植えが終った五月、土用の入りのころ、害虫の発生しやすい七月のころなどと、いずれも五月中旬から七月上旬の間の稻作の重要な時期であった。村人がその地域の神社か寺に集まり神事や法要を行なったあと、松明の火を焚きながら走り回り鳴らして太鼓を叩き大声で呟え言をしながら腰を立てたり舟を揚げて、行列を組んで水田を巡って福にいた虫を集め村境まで送り出すという方式が一般的であった。寺の闇事が大きい場合には「大船若狭」を持ち出していく水田にむかってめくり折る例もあった。四国では、水田をまわる所作だけでなく実際に虫を駆逐つしまえて竹筒に入れたり紙に包んだりして捨てる例も多かった。西日本の行列ではサネモリサマ(寒盛様)と呼ぶ姿勢で作った大きな人形を抱いて走り回る。豪華に装せて運んだりする例が多い。サネモリサマというのは齋藤家盛のこととて、実盤は稻桶につまづいて討ち死にしたので駆除の虫と化したものとか、田の中で討たれたるときに「縄の虫となつて怨みをはらしてやる」といったという言い伝えがある。この

新藤実話は平底に仕立てて木曾吉良作事とらの脚附の歌、決死の覚悟で白糸をくわめて路の面幕を着て出陣し戦死したところが、平安物語」にみた「能『実盛』」の題材にもなっている。その歴史と現在の民俗との関係はまだ明らかにされていないが、この伝承の中からは、「少なくとも」一つの考え方などが抽出できる。「一は御駕前用につながるもの、二は討死にした実盛の怨霊が宿る虫害となつた」として、討ち死にした実盛の怨霊が宿る虫害となるたゞこれを愚めることによって虫の害を防ぐのだとする考え方、あつゝいは西園信臣につながるもので、「サキモリ」という名が福の「サキモリ」を守ると普通することから福の実を守る靈験の神と見る考え方である。行列の作法については、田の曉道を自由に進るといふものが多いが、中にはサキモリミナ（実盛道）などと書いて道順が決まっている例もある。唱え三番には、「斎藤別當実盛、稻の虫は死んだぞ、後は栄えて、エイニイオー」「送った送った稻の虫送った」というようなもののほか、「なんまいだ」とただ名前を唱えるものもある。行列の最後の段階では村境まで送り出しそこで人形や松明などを焼き捨てて終りとするタイプと、川や海に流し捨てるというタイプがある。また、その村境に札を立てて村内安全を祈るという例もある。一方、村内を巡り村境に捨てるというだけではなく、山口県長門市などでみられる事例のように上流の村から下流の隣村へと人形のサバーリマを順番に送りそれを受けとつてリレー式に次々と最後の村まで運び、そこへ海へ放り捨てるという方式もみられる。このような虫送りの行事において注目されるのは、共通して病・罪過・不幸をみずから村落内において処理しよつとするのではなく、村落の生活圈外へと放逐してみずからを清浄化しその小世界の安寧を得ようとする、自浄のための不浄処理を自領域外（隣村）へと依存する志向性である。

6. 川崎
『塩地蔵』石仏



卷之三

犀耗が激しいため像容が不明確

6. 「植地蔵」石仏（「越谷市金石資料集」に掲載なし）

石塔解説

※安置や子育ての地蔵として塩の奉納を通じて信仰されている。

聖徳寺のイチョウ

市指定・天然記念物

昭和59年9月27日指定

●越谷市北川崎18(聖徳寺)

北川崎聖徳寺のイチョウは、樹高およそ20m、幹回り4m、幹は地上3.41mのところで数本に分かれ、さらに上方で多数の枝を広げている。このイチョウは雌株でギンナンの実を結ぶ。樹齢は400年くらいと推定されるが、樹勢は旺盛である。



木造阿弥陀如来坐像

市指定・彫刻

平成2年2月20日指定

●越谷市大松50(清淨院)



木造阿弥陀如来坐像

市指定・彫刻

平成2年2月20日指定

●越谷市大松60（清淨院）



清淨院本堂に安置されている木造阿弥陀如来坐像は、衲衣を偏袒右肩にまとい、上品上生の定印を結び、結跏趺坐する像で平安時代に彫刻されたものである。

一木造、彩限、白毫珠は水晶を嵌入、素地仕上げ、螺旋12段23列、左右背先は一材(右背先と手首は寄せた可能性もある)で左袖先を含んで左背先に合わせる。膝前は横一材で両足裏を膝上に露出し、底部にクサビを入れ鞍部材と合わせる。右足裏は左袖下にかくれる。背面襟部分に金箔筋があり全体に延縫路がある。(材質不詳)(像高60.0cm)

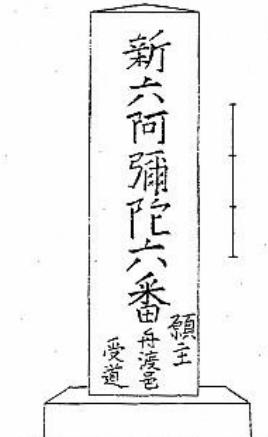
實じるこの寺院は「木佐庄山淨土寺清淨院」と称し、新町時代の中頃に現れた。松、大杉、川崎、向島、大吉を領有したので、「大ヶ原木山」(もみ山)とも呼ぶ。元禄八年(一六九五)に書かれた『清淨院開山並びに由緒』によると、嘉慶元年(一三八七)七月二十八日とある。

なお、ここには郡谷市の史跡に指定された開山塚(賀真人上の墳墓)との伝えもありがある。その通りである。

室町時代の六代将軍義教の時、結城主の臣官野田氏に嫁いだ大川氏の娘が夫が将軍義教の率いる軍との戦い(結城合戦)で戦死すると、松寿丸とその乳母をつれて実家である大川氏に落ちのびる。しかし、松寿丸が抱いて海に入水する。翌正月(一四四一年)正月十一日の夜のことである。この海に入水した三人の化身である三頭の大蛇が浪をひき込んで出没し、人々を恐れ出す。文安四年(一四五七)三月、清淨院の開山僧賀真人上人が化け鳥になってしまったとて山門の東にあつた湖)から大蛇の化身である細人やがて身の上話を聞いていた婦人は、その「南無阿弥陀仏」の念仏を石頭から湖の東側に置いていた婦人のために念仏を七日間唱えてくれるように願む。上人は婦人のために三年三月二十一日より日夜仏を唱えると、一十六日の真夜中になって地鳴がくぐらぶりと聞えた。夜が明けて湖を見ると湖は陸地となり、清淨院のある處は小高い山となつた。この小山は「蛇峯」とか「開山塚」と呼ばれた。上人は二年後の嘉慶元年に没しと推定される。

また、この清淨院のそばの古利根川の崖邊には現在鐵の橋梁による下流(大杉・川崎の境あたり)から引き込まれた水路が船着き場まで続いている(現在このあたりは砂地である)。よく船が泊まっている。よく船が着き場の樹の大樹(現在もあつ)につながれていたといふ。この砂地であるため、すむら、ほんまきうなどの貝塚栽培がさかんで、これらを船に積んで東京方面に運んでいたのだせつだ。

※六阿弥陀參りのために寺院に建てた標識である。六阿弥陀參りとは阿弥陀如来を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に順次回遊する参詣である。江戸の時に町で盛んに行なわれた。現在、増林の松泉寺で毎年10月第1日㈯に「新六阿弥陀參り」として行われた。現在、増林の松泉寺に二番、松伏町の上赤岩の頭光寺に三番、甲子方の林西寺に四番、大泊の本堂の西側にある清淨院の標識があるが、残っている。頃はすべて船越村の受道である。「一番」は天福寺であるが、残念ながら標識石塔が現存していない。なお、「登昌」の報土原にも「東京西ヶ原」(江戸の大回忌寺の三番算(うづ))と書かれた扁額が残っている。



新六阿弥陀六番 標識石塔

力松淨淨院

清淨院開山塔

大松清淨院

寶徳元年

當院開山寶塔

七月十九日



10. 清淨院開山塔（越谷市金石寶塔集に掲載なし）

所在地 大松・清淨院
石塔形式 特殊型（面々東向き・高さは中）
年 命 元文元年（一七三六）
【左側面】 当院十四世尊代
【正面】 定改四四四四
【右側面】 宝徳元年
当院開山宝塔
七月廿八日

11. 清淨院中興文薦上人の墓塔（越谷市金石寶塔集に掲載なし）
所在地 大松・清淨院
石塔形式 宝徳印塔（東北東向き・高さは中）
年 命 不知
【塔身部左側面】 真薦社
【正面】 文薦上人
【右側面】 七月廿一日

12. 大川戸杉浦家の墓塔（越谷市金石寶塔集に掲載なし）
所在地 大松・清淨院
石塔形式 上面開丸角型（東北東向き・高さは高）
年 命 不詳
【左側面】 定元院般乗譽覺心義道六巻士
大衆院般西岸春泉居士
國乘院般光譽用吟大師
定多院般長譽慈心養道居士
【正面】 定元院般乗譽覺心義道六巻士
大衆院般西岸春泉居士
國乘院般光譽用吟大師
定多院般長譽慈心養道居士
【右側面】 大川戸杉浦家の墓塔
大松清淨院

大川戸杉浦家の墓塔 大松清淨院

清淨院開山塔

市指定・史跡

昭和52年1月25日指定

●越谷市大松60(清淨院)

淨土宗大松清淨院は、その由緒書によると開山僧賢真が嘉慶元年(1326)の示寂を伝える古刹。境内には開山塔と称される円墳があり、ここには、嘉祥元年(1225)銘の板碑があったという(現在不明)。

昭和49年、伝説の多いこの開山塔の発掘調査が行われたが、この墳丘中央部から人間の齒4本、唐錢1枚、それに鉄釘などが出土した。年代は測定できなかつたが、死者を埋葬した墳墓であるのが確認された。

この墳丘は砂土であったため、空気が入り埋葬者の姿や形はことごとく土に化し、誰であるか識別できなかつたが、開山塔と

称されていることから開山僧賢真上入の墳墓であるともみられる。円墳の高さは1.8m、東西13.5m、南北13mでもとは竹や雑木に覆われていた。



【右側面】

田 六百卒
「十一日額封式」

古 庄 永次郎・父定元・弟定政之弟
十六日於文薦社文薦上人

※文薦は「丈に三本足」とある。杉浦家はこの一つの家で見られる。※右の文薦には焼が入っているが、これは読みやすくなるために筆者
が入れたもの。

大川戸に住む杉浦家の祖は清淨院院である。定政は開山廟の娘いが姓川戸の防護のため、堅固な壁として造成された隠匿を見なすことができる。杉浦家はその後は開山院代の伊奈家に代々仕える有力家臣となる。



13. 清淨院中興文薦上人の墓塔

正面面・右側面はともにかなり摩耗していく全くわからない。左側面はかなり摩耗しているが一部解読可能である。
清淨院の中奥である文薦上人(貞林社文薦上人)は戦国時代の頃の第十代の住職である。永正十八年(1521)正月、敵である八条氏(現在の八潮市あたり)の頭領八条氏を払い払って、率ひられた新方氏の砦頭である向坂住主新方氏の領地を取り戻した。さうに戦に勝てて焼き払われた清淨院を再建した。後に人々は文薦上人の體を敬い、「新方様(しんぽうさま)」と呼ぶ。後々まで信仰されてきた。

なお、文薦上人は高麗上人ともいわれる。元徳二年(1393)に没す。

虫追いの道順と幣束を立てる箇所



- 42 -

1

越谷市の域の力石

(15) 川崎神社・北川崎

15

昭和四十四年発刊の『越谷百氏常習者』によると、都市化のはげしくなる昭和四十年頃までは、六月から七月にかけて越谷の市街地を含む周辺の農村地帯ではかなり広範囲な地域で「虫追い」の行事が行われていたといわれ、この行事がかなり普遍的に盛日地帯で行われたことがわかる。調査報告によると、上間久見・塔林・増原・砂原・小曾川・谷中・児童園・浦生・向畑・三野宮・平方・大連・大治・袋山・大房・花田・四町野・越谷・西方・東方・伊原・上谷・大武・越ヶ谷宿などで行われていた。しかし、現在ではからじて北川崎に残されているに過ぎない。かつては新方地区でも、大吉・向畑・大松・大杉などが北川崎と同じように虫追いを行っていたという。それぞれの地区で、虫追いの日には夕方暗くなると、領守を出発して、廣道を通り目的地までタイマツを灯して歩いた。このようなことから、それぞれの村ごとに大きなタイマツを説いて作つたといふ。

タイマツ作りの工夫

タイマツを大きくすると重量がかかるので出来るだけ軽く、しかも良く燃えるように心に葉煙のカラを入れなど工夫をこらした。このように自分の背丈より大きいタイマツを作つて引するようにならが歩く人も多かったという。

葉煙はこの地域では茅と同じように繊作として盛んに栽培されたといふ。特に戦後の物の乏しい時代には油と交替してもらえるのでこの葉家でも作つたといふ。

虫追いの由来については西方村（現越谷市）の『田記』（卷）に、寛政三年（一七九一年）の夏は天候不順でことのほか稻に虫がついた。このため西方村では葉煙のタイマツを作り、領守の燈籠の火を移して虫追いを行つたら、虫が次第にいなくなつたので、その翌年から一年に一度虫追いの行事を定期的に行うようになったといふ。これが周辺の農村地帯に広まり、今日の北川崎の虫追いに受け継がれたものと思われる。

虫追いに用いる葵名山神社・雪電神社の主祭は北川崎の人々が代参請のとき受けたる代参請

北川崎の代参請は前記の種類・當数を含めて現在、御殿・香取・大杉・大山・戸隠の七つの説を行つてゐる。これらはすべて五年を一つのサイクルとして代参人を決める組している。このうち戸隠を除いた六つの説は三月～四月のうちで代参に当くが、戸隠は大分は多い關係で五月中・下旬に代参を行つてゐる。かつては一月十一日のオビシヤの日に、代参人を決めるタジ引きを行つてゐたといふが、現在では戸隠は終つた二月下旬頃に組員が神社の集合所に集まって翌年の代参人を決めている。代参に行つて來ると、代参人は請負の家に手みやげがわりにマツチ一個をつけてお礼を配るといふ。

虫追いに使うおれもの代参のときに代参人が預かって来て、そのまま虫追い当日まで管轄に保管しておいた。

虫追いに使用されるタイマツは葉煙が最も通しているといわれている。かつてはこの地域どりの家でも水田の洗浄として糞を育つて來ていたので、葉煙などの家でも葉煙であった。しかし、昭和三十年代後半から次第に葉も作られなくなり、虫追いに使うタイマツの材料にもとく有様となってきた。このような状況の中で、虫追い行事も一時、開拓の危機をむかえたが、春日市慈恩寺の農家にたのんで糞を作つてもらい、この葉煙を説り受けている。

虫追い当日

小笠さんじゅう
あづき粥

タイマツ用度の確認

虫追い当日は最近はあまり作らなくなつたといふが、小笠さんじゅうやあづき粥を作る家もある。あづき粥は「土用つけ」と呼ばれ、あづきの粥の中に米の粉を練つて作った團子を入れたもので、暑い土用に食べると病氣もせずに除駆でいられるということで食べる習わしがある。

午後五時頃、年齢が神社に来て、拜殿の壁をあけ、神さまへの供え物の準備を行う。ま

た、前日、作ったタイマツを境内に立てかけて並べる。みんなが集まって来る前に村の字
焼いの水田に立てる幣束を作ったり、行列に用いる錦・太鼓・提灯等を用意する。

幣束は菅草の先端を二つに折り、その間に作物の神さまである群馬県の様名山神社のお
札と雨乞いの神さまである群馬県板倉町の雷電神社のお札をはさんで、先を麻のひもでし
ぱうで作る。この幣束は氏神さまに供えておく。

精良を精さまに供え、虫追いの詠舞を行っている間に、夕闇が迫る午後七時頃ともなる
と人々がタイマツをついて村社の境内に集まってくる。村の人々が集まると年齢が出来
て参加する人々にお神酒を貰まい行事の祭事を行ふ。このあと、神社の燈明を下げて來
てタイマツに火を入れ出発する。

かつて、交通量が少ない時代には、今日のように交道規制もきびしかつたので、日
が沈んで暗くなつた八時頃出発していたが、現在では警察に届け出て、警察官に交通整理
をお願いするので、日没前の夜七時頃に出発する。行列は、提灯・錦・太鼓・幣束持ちと
続き、このあとタイマツを持った村の人々の列が遙々と続く。

錦・錦・太鼓・幣束持ちは年齢の役割りで、錦・太鼓は二人でかつぎ、うしろの人が
たたく。提灯・幣束持は各一名である。

行列は神社を出発したあと、村を東から西に約二キロメートルほど歩く。ちょうど北川
崎の川端・吉島・下町・勢至前・坂戸・太子面・波田・弁押向と八つの小字をすべて通る
ような道順になつており、神社のある川端を抜いたやつの字通りに横名山神社・雷電神社
のお札をはさんだ幣束を立てていく。このとき、神社と共に焼米・焼豆が供えられる。

この間、タイマツをかざした人々は、錦・太鼓の音頭に合わせて、「稻の虫 キーライ」と叫び、行列
を作つて進む。歩いて行く途中で燃えた麥藁がバラバラと道路に落ちるが、行列の後を走
る女の人がたかほつきなどて火の始末をし、あぶなくないようによじながらついて来る。

およそ一時間ぐらいかけて、北川崎と大形の境の平新堀まで歩いて来る。午後八時過ぎ
頃、まつ辻な用太欄に到着した人々は土手の斜面にタイマツをすべて投げ込み、おたきあ
げをする。みんなが到着し、タイマツが遍に投げ込まれると、まつ赤に燃え、あたり一箇
が明るくなる。タイマツが燃えつきたあたりで太鼓が打ち鳴らされ、自治会長の首頭で手
じめが行われて、行事が無事に終了する。

かつてはここで自治会長が明日は正月になりますと告げて、翌日の農作業を休んだとい
う。今では参加した人々は、ジャニーズをもううて三三五五、家に帰る。

虫追いの行事に必要な経費は川崎神社の水田があった時代には米の収穫で得た取入で經
費に充てたが、お神酒は奉納された酒があつたし、幣束に必要な竹なども竹のある家で用
意したので、さほど費用はかからなかつた。現在は越谷市から補助金をもらいジャニーズ
等を買って参加者に配つてゐるといふ。

三、越谷市史民俗資料

少
平

ぬおつぱらい。空おくりともい。あそから一人、氣守の久松

間にはほんと用ひました。
呂官はしたくほんぱにしめたわを譲って教書が底がらないよう折騰
をしてもらつ。

三

ク文庫に於ける、竹安

卷之三

「お前がホーリネスをや」といひながら、田舎のまわりを歩

(放課後やっていたが、お孫の帰途以来、行なわなくなつた。)

卷二十一

まわってないな。今はやらない。

卷之三

卷之三

卷之三

の大きいも、他の種と大きな変化はなく、一筋一本の細胞を作

日の新聞は空港がちょいちゃんと違うんだから、就いてタイヨ、そして

でが男と、行列を並んで日の出を一まわりして、短距離の旅へ納

卷之三

百万点にないが、如意いにする。子供が喜びの聲までやめさせ

戸から一人ときていた。静寂から暗處を覗いて田の中の団はの

おじかせとじがり 年賀が世話をすむ

お詫びいたい事で御座ります。これを許す寄り居者様社でお

はらいをうけたぬめど、そして外をへければ身をひらひらとまわる

題にする。これを見る見物人多かつた。最後にはまた音歌社に

二〇九

の事。三月の事は三月十四日の事である。英國のニヤ

ナキでかたつむりに決算するなど、取扱いが不規則で、運営も複雑である。

け、その火でな刃をつける。太鼓を叩かがたとき、刃をなして斬

卷之三

०

地の道を歩く。西脇先生の大だるの腕で、懸け瓶の松明を照めて、手にかかるとなる。この三枚もの久遠いも八年前に廻此され

卷一

を作り、夕方が規定の間に燃まる。そしてその供養祭とお盆祭で大きな火を立たせんに火をつける。前や太鼓をならしながら村をまわり、最後にもええ聲りを燃す。通りは伏っている。翌日一日中東走り正月と言つてこらそうを作り出む。

卷之九

(第三回三十九)「此の三ヶ月」とおさす。タダをはるためには、まことに第三月はにぎやかにする。商店は賑うており、大きな騒動だけは生まざる。五人はやしにあわせ、タリトキタリと、喜びた。悲つた。悲つた。タリトキタリと、笑くといふ。別荘の隣に別荘を併せて、

卷之三

一花 田一
山翁は八月二十日におこなわれる。急激から一人ずつ出、それを松明を携って、お寺に集まる。年老行者が中心となるべく、太鼓をたたき、行列を組んで幕殿へとまわり、お寺の廟へと来る。残った松明をそこでもす。この行事も毎初回十年で中止となる。

104

一伊原上谷一
お通い。六月上旬、火薙郡高岡村のものと云はれで六尺の長さ
につくる。タマノ松脂を塗るの裏では久の豆付地、上谷では粗
筋に見る。お前門のろうそくに火をつけタマツに火をつける。
湯湯舟を焚み、煙・太鼓を先端に出発する。年古がいる。

二〇二

くらいの長さの竹の先で、火と煙を腰帯に巻きつけて作った煙刀
は火をつけ、太刀、扇をたたきながら、田の中央を歩き廻わる様の
姿を退けた。那年毎に日が酉酉りてられ、大正七年一五〇、越々
郡役一十四日、大正二十六日など。戸籍で算替して度い。そしたら
出張して行なつた。昭和二十九年ころから行なわれない。

七

たたきながら、オーライオーライと叫んで耕作の小を歩くのである。松原は各自で用意するが、荷車を運んで、米袋をその間に並べて、間で重って作ったもので大きいのは三メートル程もある。馬鹿若狭の七疊ごろから十時ころまで通った。耕作では社から出給し、本町では役高社から出資した。これは主に農業の人たちが心とよけてやる心のこもったものだ。

れ、それ以外は年齢行事がお寺の施で授與をもやすだけになつて
いる。

二十一

中野田では、神社（松原神社）を中心とし、百万遍と曳山りなどを行なう。

卷之二

女将い。七時から、変わらず忙しいままの朝食会席（西式洋食）に始まり、復明をあげその火をライマフに火をつけ、兄と太鼓を叩きながら部屋内の踊り場を回った。

一
七

一尺で長き頭領の筋引をゆるむ社に居まり、年齢がおじ間から
老練にへりまつし、それからトライアフに火をさける。自由競争手に強
い活潑の手の大きさを「やうやく」と言ひながらゐた。もえ
はうは自分の酒の中に落してきだ。能調する者は一軒に一人であ
つた。今はない。

案外、知らなかつた越谷を歩く

うどんや 鰻 虫追い

江戸時代からの老舗・大沢の「うどんや」さんの鰻。
「北川崎の虫追い」は、たいまつで虫を追う県指定・無形民俗文化財。
そして、聖徳寺、清浄院など「越谷の知らなかつたところを訪ねる見学会」です。

とき 平成 21年 7月 24日 (金)

集合 越谷市大沢橋際「うどんや」前
午後 4時

参加費 3,000円 (税込、バス片道、資料等)

コース うどんやで鰻をとお食後の後、バスで「松伏役場跡」へ。
塩地蔵のある聖徳寺、市指定文化財の仏像がある清浄院
見学。川崎特社脇切りでさ法半ころから「虫追い」をお楽し
しみください。お参りは自由といたします。

ご案内 会長 宮川 透 会長 加藤幸一

参加お申込み ハガキに住所・氏名・電話番号を記入し、

平成 21年 7月 17日 (金) までに、〒343-0843 越谷市蒲生西町 35-26

草川吉洋まで。お手数ですが、講演会のお申込みとは別にお願いいたし
ます。

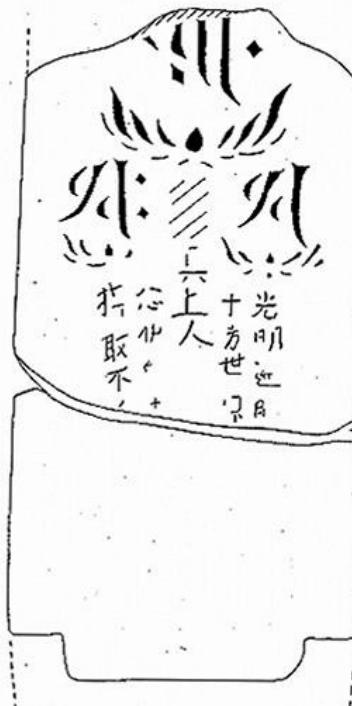
NPO 法人 越谷市郷土研究会

引用文献 <次の文献から、引用させていただきました>

- ・大山泰弘<(有)温鈍屋代表取締役>著・編 資料 ☆
- ・北川崎の虫追い—越谷市大字北川崎一 埼玉県教育委員会編・刊 S60.3 ◎
- ・ギメ東京日光散策 レガメ日本素描紀行 青木啓輔訳 雄松堂出版刊 S58.7
- ・越谷市の文化財(第12集) 越谷市教育委員会編・刊 H10.3 ※
- ・文化財講演会レジュメ「日本一の力持 越谷出身 三ノ宮卯之助」 高崎 力著
H19.8 △
- ・平成7・8年調査 新方地区 加藤幸一著 □
- ・平成21年版こしがや案内図 越谷市広報公聴課編・刊 H21.3
- ・日本民俗大辞典 上下 新谷尚紀他編 吉川弘文館刊 199.10 00.9 ▽

開山塔に差し込まれる板碑

開山塔の板碑
次のように刻まれている。



模写 (縮尺 17.5%) 加藤幸一

(梵字サク) 光明院
(梵字サク) 十方世界
(梵字サク) 不動心
(梵字サク) 持取不

*梵字サクは、阿弥陀如来の略稱である觀音菩薩。
梵字キリークは主尊の阿弥陀如来。
梵字サクは阿弥陀如來の略稱である勢至菩薩。

◎頂部 山形をした頂部は、すでに破損してて欠けている。

◎塔身部の下部 中程から割れたうちの塔身部の下部の方は、解説不能である。
ここには、年号や年月日などが刻まれていたと思われる。

◎塔身部の上部 塔身として地面に立てる場合の土中に入るべき基部は、欠けている。
開山塔の上部にはめ込まれるようにと基部を加工したためである。

◎補修 塔身部の中程に割れた塔身部の上下の部分を二カワでつなげた跡があるが、これは
岩井義氏によって補修された跡である。

このページは加藤幸一作成資料によりました